Why hold a Speech Contest?: Developing Communication and Communities in an Intermediate Japanese course

この発表では、本校の中級クラスでのスピーチコンテスト・プロジェクト実施の経緯、その成果等についてまとめ、問題点も含めて実践報告する。

スピーチコンテストのような発表の機会は学習者に有益であるという考え方は一般的であろう。この発表では、より具体的に、三つのレベル（ナラティブを書く課題、パブリックスピーキング練習とオーラル能力の向上、コミュニティ育成と拡大）でその意義を考察する。

本校では従来の作文の課題はしばしばトピックが与えられており、学習者は受身的になりがちなのだが、スピーチコンテストでは、冬休みの課題として自分の伝えたいメッセージを中心に自主的にナラティブを書く。この自分に最も身近な問題を人に伝えるというコミュニケーションは、学習者に意味のあるものであり、そのプロセスは ACTFL が中心となる外国語教育スタンダード５C's の第一分野 Communication で提唱されている。

次に、スピーチコンテストは書く能力だけではなく、オーラルの面でも能力の向上を図ることができ、二重の効果がある。発音や効果的に話す練習をすることで、スピーチとしてのメッセージ性を高め（Luoma, 2004）、また更には、話す力の全般的な向上にも繋がる （Bygate, 1996; Bygate & Samuda, 2005）などの利点が挙げられる。これも５C's の Communication の意図するものである。

さらに、出場者のみでなく他の学生も司会やポスター作成を担当し、観客として応援することでクラス参加型のイベントとなり、教室を超えた学習スペースを共有する機会となる。そればかりではなく、スピーチコンテストは他の学年の学習者や日本語母語話者が観客または審査員として参加することでコミュニティの拡大に繋がり、この点で外国語教育ガイドラインの５C's の第五分野、Communities に関連する。

実施の結果としては、一昨年から行っている学生からのアンケート調査では好意的な意見が多いものの、問題点についても指摘があり、教師自身もいくつかの問題点とその対処の仕方を検討した。特に、１）コンテスト出場者が作文で選出された人に限られているため、話す練習の利点を実際に享受できる人数が限られる、2）授業外で発音の個人練習が行われることで学習者にかかる負担が大きくなる、３）継承語学習者と非継承語学習者との相違を実施にあたってどうするか、さらに４）コンテストで公平かつ教育的な評価はどのようなものか（Winke, Gass & Myford, 2013）が考慮を要する点として挙げられる。

この発表で、プロジェクトの意義、内容、学習者のアンケート結果を考察し共有することで、同じような試みを実施している他大学と意見交換して、プロジェクト検証の機会としたいと考える。